

## 速読術と遅読術で成功しよう

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

パーキンソン病との戦いで有名な俳優のマイケル・フォックスが、テレビのインタビュー番組で面白いことを言っていた。

病気になる前の自分は、川の流れの中にいた。今の自分は、池の中にいる。川の速い流れに身を任せていれば、泳ごうと思わないでも、自然に流されていく。池の中の自分は、岸まで独力で泳いでいかなければならない、と。

この喩えが、速読術と遅読術の違いを示しているようで面白かった。彼は、ハリウッドの俳優としての出世街道をまっしぐらに走っていた。その流れに乗って生きる努力をすれば、成功は間違いなかった。

もちろん、ただ流れに身を任せているだけでは不十分で、自分でも努力をしなければならない。

その流れに身を置くことができたのは、彼ひとりの力というよりも、多分に幸運があったであろう。しかし、その幸運を真に自分のものにするためには、流れの意味を読み取り、それに対応した行動を取らなければならない。

I T時代の速い流れの意味を読み取り、それに対応した生き方を求める方法が速読術だと言える。

それは、一方では、時代の流れに身をゆだね、送られてくる膨大な情報にすばやく目を通す、いわば受け身の読書術であるが、一方では、手に入れた情報を巧みに応用して、新しい方向を作り出そうとする、能動的な読書術でもある。

マイケル・フォックスは、パーキンソン病という難病を得て、突然、将来を約束するかに見えた流れから放り出されてしまった自分を、池の中にいると表現したのである。

その池の中で、やっどこさ水面に首を出して浮かんでいる状態から脱出するためには、岸まで泳いでいかなければならない。それも自力によってである。

この状態で必要になるのは、状況の綿密な分析と合理的な方策であろう。自分が置かれているのは、まったく動きのない、たった一つの状況である。どちらの岸へ向かうのか、どのように泳いでいけばよいのか、その場の状況をよく見て、適切な判断を下さなければならない。

この場合、必要なのは速い読みであるよりも、むしろ慎重な読みである。ただ一つの状況を徹底的に分析して、自分がどの方向に進むべきかを、はっきり見定めなければならない。

私は、こういう状況でこそ、遅読術が有効だと考えるのである。遅読術によってしっかり基礎を固めたうえで、再度、時代の流れに身を置くことを考えればよいのである。

岸にたどり着いたら、いちど丘の上にも登って、流れる川を見おろし、遅読術で得られた知識をもとに作戦を立て直したらどうであろう。

マイケル・フォックスの「池の中」という言葉を、失敗や挫折の喩えと取るならば、健康なあなたは、もう一度川の流れに飛び込んで、可能性を試すことができる。

マイケル・フォックス自身は、病ゆえに道を閉ざされてはいるが、それでも、パーキンソン病患者を救う事業に活路を見いだそうとしているのである。

私は、IT時代の流れを読み取るために、速読術はきわめて重要な手段だと考えているのだが、その流れに押し流されてしまわぬよう、時には自力で岸边へ泳ぎ渡り、地上の離れた一点から、川の流れを見おろす必要があるのではないかと考えている。全体的、総合的な視点を獲得するためである。

つまり、速読術と遅読術の両方が必要だということだ。速読術に関しては、わらし仙人著『30倍速読術』（ゴマブックス）にたいへん教えられたのだが、実のところ、私は、この本を「遅読術」によって読んだ。

ゆっくり時間をかけ、何度も繰り返して読んだので、この本一冊にかけた時間は相当なものだったと思う。『30倍速読術』という本は、速読では読めない本なのだ。

速読で読んだら、内容の真の意味は理解できないであろう。遅読し、内容をこまかく分析することによって、ようやく中味が見えてくるといった本なのである。

わらし仙人自身、この本を完成するのに2年半かかったと書いている（同書149頁）。速読術によって、驚くべき「集中力」を手に入れた仙人が2年半かかるのだったら、普通の人には、その倍の5年かかってもうてい書けないであろう。

そして、著者が執筆にかけた時間は、それなりの読書時間を要求するのである。もっとも、この本が間接的に「速読」を助けてくれる点のあることも忘れてはならない。

仙人は、この本を書くために50冊の「速読術」を読んだという（同書149頁）。したがって、仙人の『30倍速読術』を1冊読めば、他の50冊は読まなくても済むからである。

これは「読まずして読む」（同書116頁）という速読のひとつの形にほかならない。私は、この原理にしたがって、多くの本を自分の視野から消すことに成功した。

哲学の研究を志す者は、たいてい一人の哲学者を選んでその研究を始める。最初に悩まされるのは、その哲学者について書かれた膨大な研究書によってである。それらを読んでいたら、何生あっても足りないであろう。

私は、原則として、それらの研究書はいっさい読まないでもいいと思っている。一人の哲学者を選ぶのは、その哲学者に弟子入りするためである。まずは対面で師と差し向かい、その直伝に頼るべきであろう。

☆

☆

☆

私は、子供の頃から本が好きだった。お金があればつい本を買ってしまうほうだった。ところが、買った本を最後まで読まないという悪い癖があった。

買った後は、パラパラと頁をめくってみたりして、内容を確認する。挿絵などがあれば、一通り目を通す。そして、ほとんどの場合、そのまま本箱へ入れて、サヨナラだった。

哲学を始めとする思想関係の本は、最初の数頁を読むか、必要な箇所、あるいは後書きを読んだら、あとはそのまま放置してしまうことが多かった。

いま家には何百冊という本があるが、そのうち最後まで読んだものは何冊あるだろう。比較的よく読んでいるのは小説類で、これは最後まで読み通したものが多いが、蔵書のうちの比率は小さく、それにたいしては文庫本だ。

何度も繰り返して読んでいた愛読書と言えるものは、十指にも満たないのではないだろうか。あとの本は、いわゆるツンドクで、こんなことなら、古書店に売ってしまったほうがいいのかも知れないが、読まない本でも何となく未練があって、手放す気にはならない。

本棚にずらりと並んだ背文字はいつも見ているのだが、これだけでも速読術と言えるのではないかと思うことがある。背文字を見ているだけで、その本の内容を手に入れているというか、支配しているというか、すでに何もかも分かっているという気がするのだ。

その本を開けば、自分の欲しいものはいつでも出てくるという所有の意識があるのだ。たとえば、国語辞典と書かれた表紙を見ると、そこに詰まっている日本語はすべて自分の所有物であり、すでにその内容は了解済みだという安心感があるのだ。辞書を開けば、忘れたものを思い出すように言葉が現れる。

知識とは、思い出された忘却だ、とプラトンだったか誰だったか忘れてしまったが、言ったように思う。速読術が、表面的な知識だけではなく、意識の深層にある知識まで読み取るものとしたら、私は子供の頃から、そういう速読術を無意識のうちに使っていたのではないかと思うのである。

私は、わらし仙人の『30倍速読術』を読んで、その感を強くした。

それまでの私は、仙人の言う「左脳人間」であり、常に「正しい理由を求める」タイプ、本は好きだが少読派で、速読ができず、一冊の本を遅読するタイプだと思っていた。

IT時代の典型的な文筆家である仙人と、哲学を専門とする私の間には決定的な違いがあって、そういう畑の違いが、3万冊の本を読破した仙人の速読術と、3冊の本で大学教授になった私の遅読術をもたらしたのではないかと思っていたのである。

仙人と私は、まったく住む世界が異なる人間のようにさえ思えた。速読と遅読は、水と油のように相交わることのない二つの読書術であった。

ところが、仙人の本を読むにつれ、意外なところに速読術と遅読術の接点があることに気がついたのである。

速読術の究極奥義は、「読まずして読む」ことにあると仙人は述べているが、私の遅読術に陰影を与え、それを活かしているのも「読まずして読む」究極的な精神の働きにほかならないと考えられた。

つまり、私は知らず知らずのうちに或る種の速読術を用いていたことになる。演習のテキストで断片的に読んだカントやヘーゲルやライプニッツが、デカルトを理解するための背景になっていたとも言える。

さらに、遅読術の特徴は、繰り返して何度も読むことであるが、わらし流速読術の特徴もまったく同じで、やはり繰り返して何度も読むこと、すなわち「複読」である。

わらし仙人は、一冊の本を50回速読するように勧めているが、これは、速読に遅読の要素を加えることにほかならない。20分で速読できる本も、50回繰り返せば、おおよそ17時間必要である。

一日の読書時間を6時間持てる人だったら、三日がかりで一冊の本を50回読むのが速読術ならば、1回だけ読むのが遅読術だと言うこともできる。

この1回には、行ったり来たりも含まれるので、実質的には数回の複読だということになる。単純に言えば、同じ時間に50回速読するのと、数回遅読するのとどちらが効果的かということになるが、こういう比較は無意味であろう。

それは、読書する対象によって決まるからである。50回速読する場合、そこまで興味や関心が持続するかどうかという問題がある。興味や関心など忘れてしまうこと、理由など求めないことが右脳派の読書術だとしても、人間の頭脳は生理的に単調さには弱いところがある。

この速読には、かなりの集中力や緊張を必要とするが、それを刺激する興味や関心なしに、読書への情熱を持ち続けることができない。

「読書百遍、意自ずから通ず」と昔の人は言った。速読の繰り返しはこれに近いと思う。内容や語句が分からなくても、何度も繰り返して読んでいるうちに、自然に見えてくるものがある。意味は自ずから判ってしまう。

しかし、この場合、分からないものを分かろうとする意欲が根底にあるのではないだろうか。このモチベーション無しには、読書を百遍も繰り返す情熱などとうてい湧いてこない。

その点、理由づけを求め、文章の細部にこだわり、分からないところを何度も読み直そうとする遅読術には、興味や関心を常に新鮮に保てられるという効果がある。

読書の対象やその活用にとっては、遅読術のほうが重要になる場合も考えられる。「読書百遍、意自ずから通ず」というが、単に通じるだけではなく、そこから何かを生み出さなければならない時がある。

受動的な理解を超えて、能動的な創造に向かうような読書術として、遅読術の重要性はもっとよく認識されても良いのではないだろうか。

最初に言ったように、「川の流れる中」に身を置いた時の読書術としては、速読も有効であるが、いったん「池の中」に放置され、自力で岸边まで泳がねばならない時、必要なのは、時間をかけた徹底的な分析と、合理的な判断である。

私は、速読術と遅読術のいずれかを取れと言っているのではなくて、状況に応じて、その二つの使い分けを提唱しているのである。

「大学受験勉強で遅読術を学んだ」という題のブログの中で、私はそのいずれにも効用のあることを述べた。ただ、あの段階での遅読術は、もっぱら試験で成功するための「暗記」を目指した読み方であった。

大学生生活で学んだ遅読術がそれとは決定的に違うのは、単に受け身の、覚えたり知ったりするための読み方ではなく、自ら問題を生み出し、創り出していく能動的な読み方だという点である。

ゆっくり時間をかけて読んでいけば、自然に遅読術になるといった単純なものではない。そこには、或る種のテクニックというか、コツのようなものがあって、それによって問題を発見し、取り出していく創造的な読み方が必要になる。

過去の哲学者たちからただ教わるばかりではなくて、自らも新しい何かを生み出していくための極意が、遅読術のうちに求められると言ってよい。

速読術は、そのような遅読術の至らぬ面を補い、全体的な視野を開示し、飛躍の場を与えることによって、その真価を発揮するのである。こうなると、もはや右脳人間も左脳人間もない。我々に課せられたことは、その両刀使いになることだと言える。

[2006/12/26 magmag]